

受容バイリンガルの言語使用¹⁾

山本雅代

I. はじめに

一般に、「バイリンガル」とは、2つの言語を、あたかも各言語のモノリンガルが一人の人間の中に共存しているかのごとく話す人と解釈されることが少なくないが、現実には2つの言語の間でその能力に優劣の差が生じることが多く、産出能力においてその差がとりわけ甚だしいことがある。このようなバイリンガルは、両方の言語について、たとえば年齢相応の産出能力を発達させた「産出バイリンガル」とは区別して、「受容バイリンガル」と呼び表される。

幼少から2つの言語に触れ、両言語との接触を保ちながら成長する子どもの中にも、このような受容バイリンガルとして成長する者が少なくないことは、多くの先行研究が指摘するところである。たとえば、Billings (1990)、Shang (1997)、Noguchi (2001)らの研究では、調査対象となった子どもの約30%が親から受容バイリンガルであると評価されていることが報告されている。このように、決して珍しくない存在でありながらも、この受容バイリンガルについて我々が知る場所は少ない。

本稿では、英語を優勢言語とし、日本語を劣勢言語とするハワイ在住の受容バイリンガル児を対象に受容バイリンガルはどのように言語を使用しているのか、とりわけ産出能力の乏しい日本語をどの程度、またどのように使用しているのか、その言語使用の状況を、使用頻度と言語混合という観点から考察する。

II. 受容バイリンガルとは

まず始めに、受容バイリンガルを「一方の言語は理解も話しもするが、他方については理解するものの（ほとんど）話さない者」（山本, 2010: 171）と定義しておきたい。

「はじめに」でも述べた通り、一般に、バイリンガルとは2つの言語を話す者との解釈がなされることが多いため、その期待に背を向けるような受容バイリンガルは、バイリン

1) 本研究は科研費（課題番号 21520421）の助成を受けて行ったものであり、ここにその助成に対して謝意を表したい。現在は、新たな科研費（課題番号 24520594）の助成を受けて研究を続行している。本稿は『科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書』（山本, 2012）としてまとめた原稿を元に、その内容を拡充したものである。

ガルに「なり損ねた者」と見なされることがままある。とりわけ、そうした子どもを持つ親には落胆のもとともなりうる (Döpke, 1992)。またバイリンガルの2つの言語はどのように発達していくのか、その言語発達の過程や様態を産出データを用いて分析しようという研究者にとっても、受容バイリンガルは言語の産出が一方の言語のみ／ほぼ一方の言語に限定されることから、研究の対象として関心を寄せにくい (Tracy, 2000)。

このように我々は受容バイリンガルを、当然あるべき (産出) 能力を失った、あるいはそれを発達させることのできなかった者という「負のベクトル」で捉えがちで、減退する産出能力の完全な喪失を阻止し、あるいは萌芽的状态で足踏みをしている産出能力の発達を促進しうる潜在能力を維持している者という「正のベクトル」で捉えようとすることは少ない。

しかし、Uribe de Kellett (2002) がその研究で明らかにしたように、産出バイリンガルが、一方の言語の産出能力を大きく減退させた後でも、その言語の受容能力を維持していれば、産出能力の回復が大きく促進されるのなら、受容バイリンガルは、いずれ産出バイリンガルに転じる可能性を秘めた、「休火山」のような状態であるとも考えることも可能である。

本稿では、このような可能性を念頭におきながら、まずは、受容バイリンガルはどのように2つの言語を使用しているのか、その言語の使用実態を事例研究で得たデータをもとに探してみる。

Ⅲ. 受容バイリンガルの言語使用実態

1. 研究の目的

本研究の目的は、未だ研究それ自体が稀少で、研究成果もきわめて乏しい受容バイリンガルの言語習得研究を興起する契機とすべく、まずは受容バイリンガルの言語使用の実態をマクロ、ミクロの2つの視座から明らかにすることである。

- A. マクロな視座からの言語使用の実態：本研究の対象である英語－日本語受容バイリンガル女兒（日本語が劣勢言語）とその母親（日本語が母語）との対話において、どの言語が選択され使用されているのかを明らかにする。
- B. ミクロな視座からの言語使用の実態：当該受容バイリンガル女兒の言語使用に現れる言語混合に注目し、その特徴および、それが当該女兒の言語発達にいかなる機能を果たしているのかを見出すことである。より具体的には、
 - a) 言語混合要素の類別：どのような言語要素（たとえば、名詞、動詞）が混入されるのか、混入される言語要素を明らかにする。

- b) 言語混合の文法的適正：言語混合が生起する言語環境を分析し、劣勢言語の言語要素が、優勢言語の文法規則（統語）に従った適切な位置に、また適切な形態で混入されるのか否かを明らかにする。
- c) 言語混合の機能：劣勢言語から優勢言語への言語要素の混入に、優勢言語から劣勢言語への言語要素の混入で言われる「穴埋め」機能（Genesee, Paradis, & Crago, 2004）を見出しにくい中、なぜ前者のようなタイプの言語混合が生起するのか。その機能は何なのか。既習の優勢言語の語の代わりに、未だ十分定着していない劣勢言語からの語を混入させ、語相互の等交換性の確認を行うことで、劣勢言語の語彙拡大を図る、そうした目的のための確認機能が、このタイプの言語混合にはあるのではないかと考え、その可能性を探る。

2. 研究方法

(1) 研究の対象者

本研究の対象者はハワイ在住の異言語間家族、すなわち複数の言語（ここでは英語と日本語）と関わりを持つ家族（Yamamoto, 2001）に育つ、ハワイ生まれの、現在7歳、小学校2年生になる英語-日本語受容バイリンガル女兒（以後、女兒）である。家族は当人を含め4人家族で、母親は日本生まれで日本語を母語とするが、高い英語能力を持つ日本語-英語バイリンガル、父親はアメリカ本土生まれで英語を母語とするモノリンガル、中学1年生になる兄は、現在、日本語を話す機会は極めて少ないが、女兒と比較するとかなり高い日本語能力を持ち、必要に応じて日本語で対話ができる産出能力を持つ、英語と日本語のバイリンガルである。女兒もその兄も現地の学校に通っている。

(2) 研究方法

研究の方法はケーススタディで、原則、毎月1回、母親が採録する女兒と母親との対話をデータとして、分析を行うものである。対話の採録は2008年4月を第1回目とし、現時点まで4年9ヶ月にわたり（諸般の事情から未採録の月が3ヶ月ある）、計54回分のデータを得ている。これらの音声データに加え、時間の経過に伴う言語環境や言語使用の変化を捉えるために、母親と女兒との面談もこれまでの研究期間を通して計7回実施している。

今回の分析には、第1回目～第43回目の間に採録した43件の音声データの中から、3ヶ月ごとの15件（#1, 4, 7, 10, 13, 16, 19, 22, 25, 28, 31, 34, 37, 40, 43）を分析対象とした²⁾。この音声データ15件の録音時間の総計は8時間46分3秒である。

2) #1～#13の5回分については、すでに山本（2010）で報告しており、本稿は一部、その報告内容と重複するところを含む。

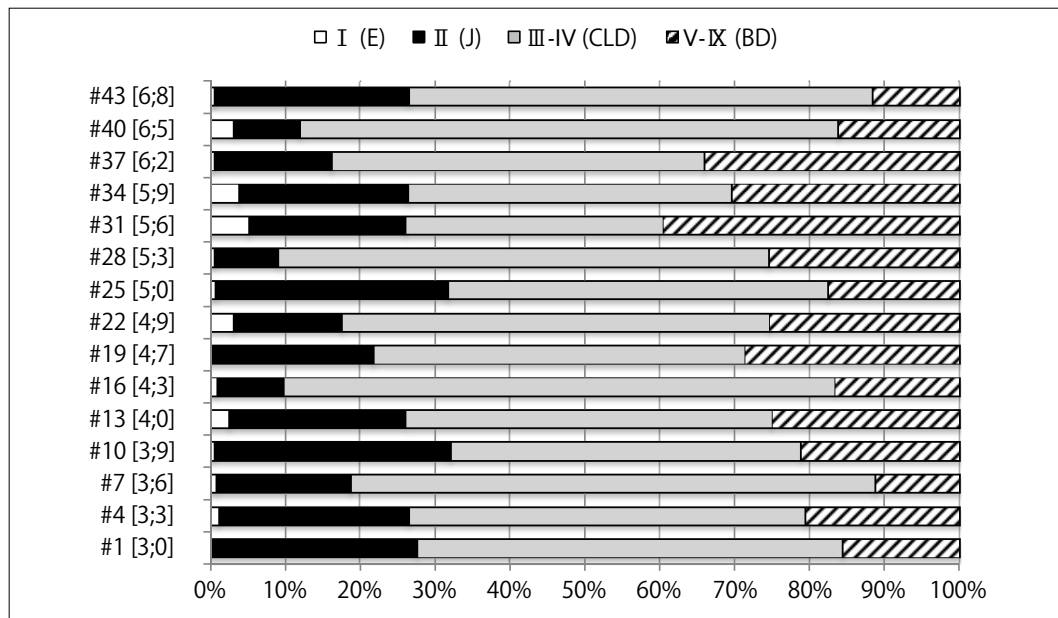
3. 結果と考察

A. 受容バイリンガル女兒と母親との間で、どの言語が選択され使用されているか。

一方の（劣勢の立場にある）言語の産出量が寡少であることを特徴とする受容バイリンガルは、実際、その産出量がどの程度寡少なのか。データの分析から、劣勢言語も、思いの外、産出されているという興味深い結果を得た。

図1は女兒と母親との間でどの言語が使用されているのか、母親の発話とそれに関連する後続の女兒の発話を1つの対話単位として、二人の言語使用状況を数値化したものである。I（E）は両者が英語を、II（J）は両者が日本語を、III-IV（CLD）は両者の使用言語が一致しないもの（例 母親が日本語、女兒が英語という組み合わせ）、V-IX（BD）は2人の内どちらか一方が、あるいは両者が共に2つの言語を使用する場合を示している。日本語は劣勢言語ながらも、女兒の発話に全く使用されていないわけではなく、比較的頻繁（女兒の言語使用状況を対話単位で集計すると、「英語」<n=1,755; 69.8%>対「日本語」/「英語+日本語」<n=760; 30.2%>）に用いられていることが、この図から見てとれる。

図1 受容バイリンガル女兒—母親の言語使用形態



B. 受容バイリンガル女兒が使用する言語混合はどのような特徴を持ち <a) 言語混合要素の類別, b) 言語混合の文法的適正>、言語発達においてどのような機能を果たしているか <c) 言語混合の機能>。

分析は、言語混合のうち、基盤となる言語（以後、基盤言語）が明瞭で、文の中で言語が切り替わる「文中コードスイッチング」（n=107）に限定して行った。

a) 言語混合要素の類別

分析の結果（表1）、基盤言語が日本語、英語のいずれであっても、混入する言語要素としては、名詞類（ここでは、名詞、固有名詞、名詞句を便宜的にこう呼ぶ）が最も多いことがわかった。基盤言語が日本語では名詞類は37件（77.1%）で、内訳は名詞17件（35.4%）、固有名詞11件（22.9%）、名詞句9件（18.8%）で、基盤言語が英語の場合には、名詞類は34件（57.6%）で、内訳はそれぞれ23件（39.0%）、9件（15.3%）、2件（3.4%）であった（ $\chi^2=5.437$, $df=2$, $.05 < p < .10$ ）。

また両者に共通する別の特徴として、動詞の混入が、いずれの場合にもほとんど見られなかったこと、すなわち基盤言語が日本語の場合には皆無、基盤言語が英語の場合でもわずか1件（1.7%）しか見られなかったことをあげることができる。

一方、両者の違いとして顕著だったのは、指示代名詞の使用頻度である。英語が基盤言語の場合、日本語の指示代名詞が混入されるケースが7件（11.9%）見られたのに対し、日本語が基盤言語の場合には英語の指示代名詞が混入されるケースは皆無であった。

表1 言語混合要素の類別（ ）内は%

品詞		基盤言語（日本語）混入要素（英語）	基盤言語（英語）混入要素（日本語）
名詞類	名詞	17 (35.4)	23 (39.0)
	固有名詞	11 (22.9)	9 (15.3)
	名詞句	9 (18.8)	2 (3.4)
形容詞		3 (6.3)	7 (11.9)
形容詞句		1 (2.1)	—
動詞		—	1 (1.7)
副詞句		2 (4.2)	—
指示代名詞		—	7 (11.9)
間投詞		1 (2.1)	4 (6.8)
数詞		—	1 (1.7)
終助詞		—	1 (1.7)
固有名詞…名詞		3 (6.3)	—
間投詞…名詞		—	1 (1.7)
間投詞…終助詞		—	1 (1.7)
接続詞…名詞		—	1 (1.7)
従属節		1 (2.1)	1 (1.7)
N=107 (100)		48 (44.9)	59 (55.1)

近年の言語混合の研究における理論的枠組み、たとえば、Myers-Scotton & Jake (2001) の4M理論やMacSwan (1999) のミニマリスト・アプローチなど深層レベルでの文の構

造や構成要素間の関係を取り扱う、より抽象度の高いレベルのものと比較すると、混入される言語要素を、表層的な文の構成要素としての振る舞いに基づき分類された品詞に当てはめ、その有無や多寡を見ることで、言語混合について我々が知りうることはあまり多くはないかもしれない。

しかしながら、言語混合には「穴埋め」という補償的機能、すなわち、ある概念を表す語が一方の言語では未習であるが他方の言語では既習である場合には、前者の言語の文の中にその既習の語を挿入し不足を補う機能があることを、そして言語発達途上にある子どもがこの機能を用いること（たとえば、Genesee, Paradis, & Crago, 2004）を考えれば、語彙の発達と言語混合との間に関係があることは想像に難くない。

こうした関係を勘案すれば、言語混合の研究に語彙発達研究からの知見が寄与するところは、存外少なくないとも考えられる。たとえば、語彙発達の研究では、言語ごとに子どもが習得する語彙に名詞が多いか、動詞が多いか、いわゆる名詞優位か動詞優位かの議論があり、先行研究では日本語（小椋, 1999, 2007）、英語（Gentner, 1982）共に名詞優位であることが示されている。これらの結果に従えば、日本語、英語のいずれが基盤言語であっても混入言語要素として名詞が多く、動詞が少ない（ほぼ皆無）という今回の分析結果が説明されることになる。

一方、先行研究では、両言語の語彙発達には差異があることも報告されており、たとえば、総語彙に占める名詞の割合が英語の方が日本語の場合よりも高いこと、また日本語については、文法の発達に伴い名詞優位が動詞優位に転換することが指摘されている（小椋, 1999, 2007）。

本研究は、言語混合を語彙発達との関係から詳細に分析、考察することを目的としているものではないため、ここではこれ以上立ち入らないが、たとえば、日本語の語彙については、もし文法の発達に従い、動詞の習得が名詞を凌ぐようになる（動詞優位）とするならば、英語を基盤言語とする文中への動詞混入の増加を以て、あるいは混入される動詞の文法的適正の度合いを見ることで、日本語の文法の全体的な発達を推し量ることが可能になるかもしれない。今後の興味深い研究課題として指摘しておきたい。

b) 言語混合の文法的適正

英語を基盤言語、日本語を埋め込み言語とする場合には、挿入される言語要素の大半が活用しない単一の形態素で、文法的適正を検証するためのデータが十分になく、この課題は今後の更なるデータの集積を待って、改めて取り組みたい。

c) 言語混合の機能

劣勢言語の語彙拡張のための語相互の等交換性の確認機能：そこに等交換性が見られると判断するための一つの要件として、言語を跨いだ同義語としての「異言語間同義語」（一

方の言語で発話された語句と同義語と見なされる他方の言語の語句のこと)の存在と、それが同一発話ないしは関連する一連の後続発話の中で使用されていることを求めるとするならば、その要件を充たす以下のような例が検出されている。

女兒 : I like the big one
 母 : おっきいほうがいいの?
 女兒 : Yeah
 母 : うん
 女兒 : I like the おっきい

(ID# 4 /32~34)

しかしながら、こちらについてもデータが寡少のため、この段階では逸話の範囲に留まらざるを得ず、今後の名詞、動詞、形容詞、副詞などの典型的な内容語の発達をにらみながら検証していく必要がある。

ここまでの研究結果をまとめておくと、言語混合要素の類別については、データ量は少ないながらも、混合要素について、ある程度の特徴が見出されたこと、また語彙の発達研究からの知見と言語混合研究からの知見とを併せ考察することで、子どもの言語発達の進展についての理解がより深まる可能性があることが示された。

その一方で、言語混合の文法的適正や劣勢言語の語彙拡張のための語相互の等交換性の確認機能については、繰り返し述べるように、分析に必要なデータが十分でなく、それらしき個別の事例は観察されたものの、統計的検証ができるほどの十分な事例は検出されず、逸話レベルに留まった。言語間の産出量の違いが大きい受容バイリンガルの対象とした研究では避け難い問題と言える。

4. 本研究の問題点

本節を終えるにあたり、本研究における問題点の内、最も改善が困難な、研究方法論上のそれを1つ挙げておきたい。

本研究では、研究対象者が海外在住で、研究遂行者である筆者が国内在住のため、毎月定期的に当地に赴くことができない。よって、データの定期的収集には、研究対象女兒の母親から協力を得て、母親と女兒との会話を母親が録音し、それを筆者に送付するという方法を採用している。そのため、発話の解釈を適切に行うための、会話の文脈に関する情報が不足することがある。そのような場合には、発話の意味内容が曖昧なものは分析の対象から外さざるをえず、そのために多くの貴重なデータが分析されないままに捨て置かれている可能性がある。

地理的な問題の改善はきわめて困難であるため、データをより多く、より長期に収集し、分析しうるデータ量を増やすという方法で対処する必要がある。

IV. おわりに

本研究では、一方の言語について産出能力の乏しい受容バイリンガルの言語使用の状況を、使用頻度と言語混合という観点から考察することを目的として、ハワイ在住の英語－日本語受容バイリンガル女兒と母親との対話をデータに分析を行った。

発話がきわめて寡少であることを特徴とする受容バイリンガルの研究は、当該言語の発話データが少ないことから、その言語の使用の実態を明らかにすることは容易ではない。しかしながら、2つの言語を習得するバイリンガルの言語習得（発達）の過程をより深く理解するためには、産出能力のみならず、受容能力が言語習得（発達）上、どのような機能を果たすのか、いかなる貢献をしようのかを明らかにすることは重要である。

発話を開始した子どもの言語研究では、産出能力の表出としての発話の分析が中心となるため、受容バイリンガルの言語、とりわけ発話が寡少とされる劣勢言語の発達に関する研究は、国内はもとより、バイリンガルの言語習得（発達）研究が、日本に比して格段に活発な欧米諸国にあっても少なく、知見の蓄積も実に心許ない。受容バイリンガルの劣勢言語の発話は、あっても寡少と言われるが、どの程度寡少なのか、単に量的に寡少なだけなのか、質的にはどうなのか、発話の言語構造には何か特徴的なものがみられるのかなど、明らかにすべきことは多い。

謝辞

本研究に長期にわたり協力戴いている研究対象女兒とそこご家族には深謝の意を表したい。

参考文献

- Billings, M. (1990). Some factors affecting the bilingual development of bicultural children in Japan. *AFW Journal*, April, 93-108.
- Döpke, S. (1992). *One parent one language: An interactional approach*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Genesee, F., Paradis, J., & Crago, M. B. (2004). *Dual language development & disorders: A handbook on bilingualism & second language learning*. Baltimore, Maryland: Paul H. Brookes.
- Gentner, D. (1982). Why nouns are learned before verbs: Linguistic relativity versus natural partitioning. In S. A. Kuczaj (Ed.), *Language development, Vol. 2*. (pp. 301-334). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- MacSwan, J. (1999). *A minimalist approach to intrasentential code switching*. NY: Garland.
- Myers-Scotton, C., & Jake, J. L. (2001). Explaining aspects of code-switching and their implications. In J.

- L. Nicol (Ed.), *One mind, two languages: Bilingual language processing* (pp. 84-116). Malden, MA: Blackwell.
- Noguchi, M. G. (2001). Bilinguality and bicultural children in Japan: A pilot survey of factors linked to active English-Japanese bilingualism. In M. G. Noguchi & S. Fotos (Eds.), *Studies in Japanese bilingualism* (pp. 234-271). Clevedon: Multilingual Matters.
- 小椋たみこ (1999). 「語彙獲得の日米比較」. 桐谷滋 (編) 『ことばと心の発達 第2巻ことばの獲得』 (pp. 143-194). 京都: ミネルヴァ書房.
- 小椋たみこ (2007). 「日本の子どもの初期の語彙発達」 『言語研究』, 第132巻, 29-53.
- Shang, S. (1997). Raising bilingual/bicultural children in Kyushu: A survey. *Research Bulletin of Kagoshima Women's College*, 18(2), 43-58.
- Tracy, R. (2000). Language mixing as a challenge for linguistics. In S. Dökpe (Ed.), *Cross-linguistic structures in simultaneous bilingualism* (pp. 11-36). Amsterdam: John Benjamins.
- Uribe de Kellett, A. (2002). The recovery of a first language: A case study of an English/Spanish bilingual child. *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 5(3), 162-181.
- Yamamoto, M. (2001). *Language use in interlingual families: A Japanese-English sociolinguistic study*. Clevedon: Multilingual Matters.
- 山本雅代 (2010). 「バイリンガル幼児: 『受容バイリンガル』 はどのように言語を使用しているか」. 『日本語学』, 第29巻第14号, 170-182.
- 山本雅代 (2012). 『科学研究費助成事業 (科学研究費補助金) 研究成果報告書』 (基盤研究 (C) 課題番号 21520421).

Language use by one receptive bilingual: A case study

Masayo YAMAMOTO

This research study investigates how one receptive bilingual uses her given languages, especially her non-dominant language, the one whose production is greatly limited. The purpose of the study is twofold: to investigate macroscopically how the subject uses the given languages in her conversations with her mother, a native-speaker of non-dominant language; and microscopically, to reveal possible functions of code-mixing that the bilingual uses in her utterances with her mother. Regarding the second purpose, the investigation is conducted on three research questions: a) what items are most likely to be code-switched; b) how grammatical the subject's code-mixing is; and c) whether her code-mixing has a function that enhances vocabulary expansion in the non-dominant language. For the macroscopic investigation, the analysis of the available data reveals that the subject's non-dominant language is used with unpredicted frequency, and, for the microscopic questions, that a) most of the switched items were non-conjugated morphemes, such as nouns. Due to the scarcity of the available data, however, a fruitful analysis of b) and c) is not yet possible and awaits the accumulation of ongoing data. This is an unavoidable problem in the study of receptive bilinguals, whose productive data are by definition scarce.